

国の登録有形文化財大牟田市庁舎本館の保存価値と活用の可能性



大牟田市庁舎本館のプロフィール

1936 (昭和 11) 年 竣工

鉄筋コンクリート造 4 階建(塔屋付) 塔屋高：43m

建築面積：1,378 m² 延べ床面積：5,175 m²

設計：福岡県営繕課 施工：柿原組

国登録有形文化財：2005 (平成 17) 年 12 月 26 日登録

市庁舎の建設にあたっては、1933 (昭和 8) 年 7 月に市庁舎建築委員会が組織され、51 回の審議を重ねた。近代日本の産業を支えた最大の石炭産業都市に相応しい市庁舎を建設するために、先進都市の府県庁舎、市庁舎の特徴を取り入れ、福岡県営繕課の計画図案と建築専門技師 (大手設計事務所) の計画案の両者を活かし、実施設計は福岡県営繕課に委託されて、当時の市庁舎の最先端の設計と技術が駆使された。

建物は玄関部及び塔屋を中心に完全な左右対称で、本体部分の中央に塔屋を持つ当時の庁舎建築の流行のスタイルであるが、水平線を強調した 4 階建ての本体の上に、4 階の塔屋とその上に展望塔を載せて垂直線を強調したところがとてもバランスが良く、また、玄関入口庇上の花をイメージした横 3 列の装飾とアールをとった各コーナーが柔らかさを表現した優れたデザインである。本館内部については、議場の天井装飾や梁意匠には、蔓や草花などの植物モチーフが絡み合い、反復を重ねながら透し模様やレース状となって空間全体を埋めていくサラセン・モチーフを有し美術史的・デザイン史的価値が優れた遺構として重要である。同時に、4 階貴賓室に設けられた暖炉周り (マントルピース) には、サラセン・アーチによる三尊形式の装飾やアラバスク装飾などが施されている。これらの前に立つとサラセン・アーチの装飾やアラバスク装飾を好んで用いたジョサイア・コンドルの影響を見出せると専門家による見立てがされている。このように、本館の建物は、数少ない戦前の官公庁建築物としての歴史性、意匠性、更には屋上に残る防空監視哨・防空障壁や高射機関銃台座が市の歴史を如実に物語る戦争遺跡である点も評価された。当時、流行した格調のある外壁のスクラッチタイルが剥落の危険から、1970 年代にモルタル仕上げに変わったのが残念である。

市長が諮問し付属機関として設置された「大牟田市庁舎整備検討委員会」の要望を尊重することなく、また、市民説明会での市民や専門家からの貴重な意見に耳を傾けることなく、「大牟田市庁舎整備に関する基本方針(案)」が作成されて『本館を解体し、跡地に新庁舎を建てる』計画が進められている。6 年後の昭和 100 年を迎えるに当たり、昭和から平成へと継承された大牟田市のランドマーク (目印) として、今もなお生きている大牟田市民の遺産 (リビング・ヘリテージ) として重要な市庁舎本館。大牟田市民の象徴として、矜持 (シビック・プライド = まちを誇りに思うこと) を高めるためにも、積極的な再生が必要である。保存と活用への大胆なアイデア構築に向けては、これまで先人が築いてこられた大牟田市の社会的知名度やプレゼンス (存在感) をもとに、さらなる全国支援や介添えを求めていく必要がある。大牟田市民にかぎらず、広く全国によびかけて大胆なアイデアを公募すべきである。 2019 年 3 月